「ひょうごエコっこ育成事業」
モデル園の事例

近所の川を子どもたちの「ふるさと」に！

神戸市立青山台こばと幼稚園

幼稚園の近所を流れる福田川は、ゴミが捨てられ、入って遊ぶことができない川です。その福田川に子どもたちが年間を通じて関わることで、川が少しずつ大切な場所になり、「身近な自然を大切にしよう」、「自分たちでできることをやろう」と思う心が少しずつ芽生えてきました。

近所の川をとことん知りつくしてみる

活動プログラムができるまで

○「ふるさと」って何だろう？

平成27年度、エコっこ育成事業に取り組むにあたり、事業の二つの柱の「ふるさと環境体験活動」「保育や家庭と連携したエコ活動」のうち、「ふるさと環境体験活動」をどのように進めていけばいいか、なかなか方向性が定まらない状況でした。

神戸市立青山台こばと幼稚園は近隣の７つの小学校区から園児が集まる幼稚園です。様々な地域から集まっている子どもたちみんなにとって「ふるさと」と思える場所は身近にどこにあるのだろうか、幼稚園がある地域は住宅地であり、その中に環境体験ができるような自然に恵まれた場所はあるのだろうかと考えた時に、幼稚園の近くを流れる福田川が浮かびました。

福田川を子どもたちは知っているけれど、子どもたちの「ふるさと」と呼べる場所だろうか？福田川で川遊びはできるのだろうか？福田川にはどんな自然があるのだろうか？まずは福田川の実態を知ろうと思い、先生たちで見に行くことにしました。

○福田川に行ってみた

橋の上から改めて川の下流域をじっくり見てみると、川にゴミが捨てられていて、正直、思っていた川の様子とは違っていたことに驚きました。子どもたちと川遊びができる状況ではありませんでした。

きれいな川で子どもたちをのびのびと遊ばせてあげたい、そのような経験が子どもたちの「ふるさと」への思いにつながっていくのではないかと思い、川遊びができる所を探して中流まで行ってみました。

中流にはいろんな生き物がおり、下流ほど汚くなかったのですが、川遊びができそうな場所を見つけることはできませんでした。

○そうだ、地域の人に教えてもらおう！

そこで、地域の方なら何か知っているかもしれない、と地域で活動する団体を探す中で「福田川クリーンクラブ」を見つけ、電話をしてみました。そして福田川を美しい川として守り育てていくための会の活動や、創作紙芝居で子どもたちに川をきれいにする大切さを伝える活動をしている方を紹介してもらいました。

○改めて「ふるさと」って何だろう？

福田川を調べて行く中で、先生たちの気持ちが少しずつ、変化していきました。

福田川は川遊びができるようなきれいな川ではないが、生き物も棲んでいるし、川を今よりもきれいにして子どもたちに受け継いでいこうと活動している地域の人たちもいる。福田川の今のありのままの姿に子どもたちが気づくことが、青山台こばと幼稚園に通う子どもたちにとっての「ふるさと」づくりなんだと考えるようになったのです。

○「ねらい」が定まるとプログラムが固まる

子どもたちが「今のありのままの福田川」に気づき、福田川を今よりもきれいな川にするためにできることを子どもたちなりに考え、そして実践していけるようにしていこう。保育のねらいが明確になるなかで、活動の取組内容も次第にできあがっていきました。

活動１：福田川にはゴミが落ちている！

ねらい ・福田川の様子を知る。

自分たちの幼稚園の近くを流れている福田川下流の様子を子どもたちと一緒に知っていこうと、近くの公園に行く途中、川沿いを歩きました。

川に捨てられているゴミがあることを子どもたちがはたして気づくだろうかと、橋の上から川の様子を見ることにしました。

「水の音が聴こえる」「面白い岩があるね、鳥みたいやな」と子どもたち。そのうち、「うわ、ゴミが落ちている」と気づく子どももいました。「ジュースの缶や」「誰が捨てたんやろ」「あかんのにな…」と友達同士で話す姿も見られました。

【読み取り】
・子どもたちは、川の様子を知るのと同じようにゴミがあることにも気づいた。今まで、近くを通ることがあっても意識して川の様子にあまり目を向けることがなかったことも分かった。

活動２：福田川には生き物もいっぱい！

ねらい ・福田川の中流の様子を知る。

福田川のいろんな場所に行ってみました。中流の様子も見に行きました。先生たちで下見に行った時に、サギの姿を確認できたこともあり、生き物がたくさんいる福田川に子どもたちが気づいてくれたらと思っていました。

歩道から福田川をのぞき込むと、魚の群れがいました。カメも岩の上で甲羅干しをしています。川辺には下りていくことができないのですが、天気が良く水が透き通っていてよく見えるので、どの子も発見を楽しんでいました。

幼稚園に戻り、子どもたちと福田川の様子を話し合いました。「魚がいっぱいおった」「カメもおったね」「私の家、あそこの近くやけど、大きい鳥（サギ）もいるねんで」「知ってる、僕も見たことあるで」と見付けたことや普段見ていることが次々に出てきました。先生が下見に行ったときに撮ってきたサギの写真を見せると、「わあ、すごい鳥やなあ」と驚いていました。

「福田川には生き物がたくさん棲んでいるんだね」と、ゴミのことだけでなく、新たな川の発見があったことを改めて実感できました。

【読み取り】
・川の様子がよく見える場所に行くと、子どもたちがそれぞれ生き物を見付けて楽しんでいた。
・家が近くの子どもは普段から福田川でよく見ていることを友達に喜んで知らせていた。自分がよく知っていることは進んで伝えたいと思っている。

活動３：芋掘り畑の近くの川(伊川)に行ったよ

ねらい
・川の自然物を五感を使って発見する
・川遊びの楽しさを知る

園外保育で伊川谷に芋掘りに行きました。農園でお昼を食べる予定でしたが、せっかく近くに伊川があるので、子どもたちに福田川とは違う川を見せたいと思い、畑の近くを流れる伊川の川辺で昼食をとることにしました。

昼食の後、河原で遊びました。子どもたちは何をして遊んだらよいか分からない様子だったので、先生がセンダングサ(ひっつきむし)を見つけて「ひっつきむしだよ！」と子どもに投げて遊ぶと、子どもたちも自分で見付け始め、子ども同士が服に付け合って遊び始めました。

また、先生がジュズダマを見付けて紹介したり、河原の石を拾って「面白い形だよ」「この色きれいだね」と子どもに見せると、子どもたちは石を川面に向かって投げたり、いろいろな草を見付けたり、水辺をのぞき込んで魚やアメンボを見付けたりして川に親しんで遊ぶことができました。

【読み取り】
・近くに福田川があるが、遊んだ経験がないので川遊びを知らない子どもたちであると実感した。
・先生が川での遊びを紹介すると、同じようにして遊ぶ姿が見られ、友達と一緒に楽しむことができた。
・見るだけでなく、河原を駆け回ったり石や草を触ったりなど、五感を通して遊ぶことで川や自然に興味をもつことができた。

活動４：川マップを作ろう

ねらい
・見たり遊んだりした川のことを思い出し、楽しかったことを絵や造形物、文字で書いたりして表現することを楽しむ。
・川を大切なものと認識する

みんなで福田川と伊川の川マップを作ることにしました。

まずは、福田川や伊川で見付けたり遊んだりしたことを話し合いました。「カメがおったなあ」「ひっつきむし見付けたね」と見付けたことを振り返りながら、友達と一緒に川の様子を絵にかいたり、マップの制作にとりかかりました。先生が撮った写真も加えると「うん、こんなところやったね」「また行きたいね」と思い出していました。

【読み取り】
・みんなで話し合い、地図を制作することで、川に棲む生き物への思いや川遊びの楽しさなどを再確認できる場となった。
・友達と一緒に出掛けて見付けたことが思い出となり、また行きたいという思いにもつながった。
・思ったことを形にしたことで、子どもの川への意識もより深まった。

活動５：海と空の約束 ～西谷　寛さんの紙芝居の会～

ねらい
・自然を大切にしようとする気持ちをもつ

「福田川クリーンクラブ」の紹介で「海と空の約束プロジェクト」代表の西谷寛さんをゲストティーチャーに招き、紙芝居の会を行いました。地域のことをよく知っている方から話を聞くことで、より深く学べると思い、実施した活動です。

「海と空の約束」は、西谷さんが創作した紙芝居です。物語は、大昔の海と空が仲良しで豊かだったこと、そして長い時間が経ちだんだんと海が汚れてしまうこと、生き物が死んでしまった海に空が雨を降らせ、やがて川を作り、生き物を育て、海を助けていくという内容です。見終わった後、みんなで感想を話し合いました。

西谷さん：「どうして生き物が死んだのかな？」
子ども　：「だって、海が汚れたから」
西谷さん：「どうして海が汚れてしまったのかな？」
子ども　：「誰かが、ゴミを捨てたから」
西谷さん：「どこに捨てたの？」
子ども　：「海」
西谷さん：「他には？」
子ども　：「それから川にも捨てたらあかんで」
「ジュースとか流したらダメ」
西谷さん：「そうだね。海と川、つながっているもんね。ゴミを捨てたらダメやね。じゃあ、ゴミを減らすにはどうしたらいいか考えてみてごらん」
子ども　：「川に捨てないようにする」「ゴミは家に持って帰る」
西谷さん：「ゴミを減らすために、みんなに伝えたいことがあるよ。物を大事にするとゴミは減るんだよ。おじさんの水筒は子どものころから40年も使っているよ。みんなも物を大事にしてね」

【読み取り】
・「たくさんの生き物が死んでしまいました」というフレーズを聞いて、子どもたちは真剣な表情となった。
・西谷さんとのやりとりの中で、たくさんのゴミが落ちていた福田川の様子が思い出され、お話とぴったり結びついたようだ。「ジュースを流したらダメ」と言った子どもの言葉には誰もがうなずいていた。
・西谷さんのどうしたらゴミを減らせるか、どうしたらいいか、という問いかけには、5歳児がしっかり答えることができていた。実体験を結び付けて考えることができたからだろう。

活動６：つながっているんだよね

ねらい
・どんな川や森、海で遊びたいかを伝えあい、絵画で表現する

「海と空の約束」の話を聞いた後、話し合いをしました。「海さんや空さんって仲良しだったんだね。海さんには生き物がいっぱいいたからとっても楽しそうだったね。みんなだったら、どんなところで遊びたい？」と投げ掛けると「魚がいっぱいの海」「川にも魚がいっぱいがいいな」「森も楽しいよ。木の実とかいっぱいあるとこがいいな。虫もいるかも」と話しだしました。

「じゃあ、描いてみよう」と紙を渡しました。すると、川を描き始めた子どもが「ここ、つなげよう」と友達を誘うと「うん、つなげよう」と山、川、海と友達の絵を楽しみながらつなぎ始めました。

全員が誰かとつなげています。「ここ、めっちゃ楽しい海やで」「釣りもできるな」と友達とイメージを伝え合いながら描いていました。

【読み取り】
・「海と空の約束」を見て、改めて山も川も海もつながっているということがどの子どもにも伝わったようだ。自然に誰からともなく紙をつなぎ始め、いろいろな友達とつなげて描いていた。
・今まで川で遊んだ経験もいかして描いていた。

活動７：川はだれのもの？

ねらい
・「川はみんなのもの、大切なもの」と今までの体験を基に心を寄せて歌で表現する

年長児全員で「川はだれのもの？」を音楽会で歌うことにしました。子どもたちの日頃の川に対する思

いを歌で表現することができると思ったからです。

雨が川となり、森や村を抜け、海へ出る間に魚や人、岸辺の緑を育んでいく、という川の生い立ちと、川の恵み、大切さを伝えるこの曲。川やそこに棲んでいる生き物への愛おしさ、そしてそれらを大切にしようという内容で子どもには少し難しい歌ですが、今までの経験と思いにぴったりあうと思い、選曲しました。

「聞いてくれる人にどんなことを言いたい？福田川のこと思い出してみようか」と投げ掛けると、「川には魚がいた」「カメもおった」「でもゴミも落ちてたよ」「ジュースの缶とか」「川をきれいにしないとね」と自然に思ったことを口にしていました。

音楽会では、どの子も思いをもって歌うことができました。先生も子どもの思いをもった姿を見ることができ、豊かな心が育ったことを実感しました。

歌の後の曲紹介では、「川を大切にしないとね」「ゴミはすてないように」という言葉が自然に子どもたちから出ていました。保護者にも子どもの成長した姿を見てもらうことができ、よい発信の機会となりました。

【読み取り】
・どの子も川への思いを広げているので、思いを寄せて歌うことができた。

子どもの成長の原動力は先生の感性

○子どもが進んでゴミ拾い、環境学習の成果を実感

秋に園外保育で須磨浦公園に出掛けました。森の中を散策していると「こんなところにゴミが落ちている」と気づき、空き缶を拾う子どもがいました。それを見ていた他の子どもも一緒に拾っています。

年間を通じて関わってきた川だけではなく、森に対しても、ゴミを捨ててはいけないと思い、進んで拾う子どもたちの姿を見て、5歳の子どもたちが、「自分で考え、行動につなげていけるような深い学び」を実現できたことを目の当たりにし、感動した瞬間でした。

○体験、表現の積み重ねが子どもの気づきを促す

このような深い学びが実現できたのは、川の自然に直接触れたり見たりして遊ぶだけでなく、話を聞いたり、言葉での伝え合い、造形遊び、歌などの表現活動を通して、子どもたちのなかに自然への思いや自ら自然を大切にしようとする心が少しずつ芽生えてきたからだと思います。

知識を得ることも大切ですが、それよりもまず、自分の目で見たり触れたりして、実体験をすることで心に留まっていきます。また、体験したことを振り返り、自分の思いを表現することで再認識することができます。その積み重ねが、子ども自ら気づくことにつながっていきます。

○子どもに気づかせたいことは何？

そのためには、先生自身が子どもに気づかせたいことを理解している必要があります。子どもがどんなにすばらしい体験をしたとしても、先生が意図をもって拡げ、深めていかない限り、子どもたちの心に留まっていきません。

エコっこ育成事業では、先生自身が、自然に対する思いをもったり、調べたり知識を得たりすることで、子どもに気づかせたいものが明確になり、どのように援助していくか分かってきました。先生の豊かな感性こそが、子どもの心の育ちの原動力だと再確認した事業でした。

〈お話を伺った人〉
神戸市立青山台こばと幼稚園
塚本伊津美 園長 、山田敦子 先生

教えて先輩！

ナゼ？ナニ？ 質問コーナー

Q 環境学習実施のポイントは？

先生が、「子どもの実態」と「地域の環境の実態」の両方を知ること。身近な環境を通して何に気づかせ、子どもにどう育ってほしいかを捉えることがとても大事です。

Q 苦労した点は何ですか？

青山台こばと幼稚園に在園している子どもたちにとっての「ふるさと環境体験」とは何かを探り、明確なものにしていくまでに時間がかかりました。「体験を通じて何を学ばせたいのか」先生たちが調べて、考えて、見に行って、たくさん話し合いをして、共通理解していくことも苦労したことです。

Q 予想外にできたことは？

環境にふれて遊び、子どもたちが歌や造形活動などを通して友達と思いを表現するなかで、より考えが深まったり、心が豊かになっていく、ということが感じられました。

Q これから取り組む園へのアドバイス

環境学習をきっかけに子どもの豊かな発想を引き出し、一緒に楽しめたら良いと思います。

環境は大人も一生涯学んでいく大切なテーマです。環境学習を通じて、大人も子どもと一緒に気づく場になれば、楽しいのではないかと思います。

神戸市立青山台こばと幼稚園

神戸市垂水区の住宅地のなかに立地している。海も近く、園舎からは明石海峡大橋を望むことができる。身近な環境に気づき、自然を大切にしようとする気持ちがもてるよう、様々な活動を取り入れながら日々保育に取り組んでいる。

住 所
神戸市垂水区青山台4丁目8-30

電 話
078-752-0700

青山台こばと幼稚園

活動プログラム　深まりの過程

〈やったこと〉

うごく

気づく

活動 1　福田川下流で橋の上から川をのぞく（見る）

拡げる

活動 2
- 福田川中流で歩道から川をのぞく（見る）
- 川の様子を話し合う（言葉での伝え合い）

活動 3　伊川の河原で五感を通して開放的にのびのびと遊ぶ（体験）

活動 4　環境紙芝居を見て思いを伝え合う（専門家の話を聞く）

深める

活動 5
- 福田川や伊川で見つけたり遊んだりしたことを話し合う（言葉での伝え合い）
- 川マップを作る（造形遊び）

活動 6
- みんなだったらどんなところで遊びたい？と話し合う（言葉での伝え合い）
- 遊びたい自然（森・川・海）の絵を描く（造形遊び）

活動 7　「川はだれのもの？」を音楽会で合唱する（表現）

〈子どもの変化〉	〈環境構成・教師の援助〉
・福田川にゴミがたくさん落ちていることに驚く	・近くの公園に散策する途中で川沿いを歩く（しかける）
・福田川には、生き物もたくさん棲んでいることに気づく	・下見に行ったときに撮ってきたサギの写真を見せる（紹介する） ・「生き物がたくさん棲んでいるんだね」と共感する（共感する）
・河原でなにをすればよいかわからなかった子どもたちが自然物を使ってあそぶ楽しさにめざめる	・川での遊びを紹介する（紹介する） （ひっつき虫をなげる ジュズ玉を紹介する 河原の石を拾って「面白い形だよ」「この色きれい」）
・川も海も森もつながっていて、そのどこかを汚すと、生き物が死んでしまうので、ゴミなど捨ててはいけないと知る	
・川が大事な場所として、心に定着する	・先生が撮った写真も加える（紹介する）
・生き物がたくさん棲んでいて、すべてつながっている森や海や川を、理想の自然の姿として再認識する 先生の予想を超えた子どもたち！！	・「海さんや空さんって仲良しだったんだね。海さんには生き物がいっぱいいたからとっても楽しそうだったね。みんなだったらどんなところで遊びたい？」（声かけ）
・「川にたくさん生き物が棲んでいる」「川をきれいにしないと」との思いを、歌にのせて、先生や保護者に対して発信する	・「聞いてくれる人にどんなことを言いたい？福田川のことを思い出してみようか」（声かけ）

「ひょうごエコっこ育成事業」
モデル園の事例

わくわくお米作り体験！春夏秋冬

社会福祉法人かすぎ野
認定こども園西脇こども園

昔ながらの米づくりを０歳から経験することで、お米には、たくさんの人の手と自然の恵みがつまっていることに気づいていきました。おいしくて、大切なお米を作り続けている地域の方々と自然に感謝し、ふるさとを大切にする心を育んでいきます。

昔ながらの米づくりからふるさとを学ぶ

西脇こども園では近くの農家の方から田んぼを借りて20年以上お米づくりをしてきました。

0歳児から土づくり、田植え、稲刈り、脱穀、おにぎりパーティー、しめ縄作り、とんど、と年間を通じて田んぼに関わっています。

活動１：れんげ田で遊ぶ

春。新しい学年にあがってすぐに3歳以上の子どもたちはバスで5分ほどの田んぼに遊びに行きます。田植え前の田んぼは一面のれんげ田。

「うわぁ～れんげだらけ！かくれんぼができるわ」「先生、れんげの蜜ってあまいなぁ」と、田んぼで寝転んだり、冠をつくったり、蜜をなめたり、思いっきり遊びます。

カエルやテントウムシもたくさんいます。カエルを何匹も手に乗せたり、おなかが膨らむ様子を見たり、子どもたちは満面の笑顔でとてもうれしそう。

子どもたちが遊びを通じてれんげに興味を持った頃を見計らい、先生が農家の人は田植えの前にれんげの花を土に混ぜて（すきこんで）、栄養たっぷりの土を作ることを子どもたちに伝えます。

おいしいお米を作るためには土づくりから始めないといけないこと。田んぼにはたくさんの生き物が棲んでいること。田植え前の田んぼで思いっきり遊ぶ経験を通じて、子どもたちは気づいていきます。

活動２：バケツ稲作り

子どもたちが米づくりに取り組んでいる田んぼは園からバスで５分程度の場所のため、毎日お米の成長を見守ることはできません。そこで、園庭でもバケツ稲作りに取り組んでいます。

バケツ稲作りも田んぼと一緒で土づくりから、４歳児、５歳児が頑張ります。昨年のバケツ稲の土と肥料を混ぜたものに水を混ぜ込んでいき、泥を作ります。

単純な作業のようですが、バケツの底の土と水を混ぜ合わせるのには、とても根気がいります。子どもたちは、ひじまで腕まくりして、汗をかきながら30分以上、頑張ります。そんなお兄ちゃん、お姉ちゃんの姿を１歳児や２歳児が興味深そうに眺めています。中には、園庭の砂を混ぜようとして、お兄ちゃん、お姉ちゃんに注意される子どもも・・・。

小さい頃から一生懸命土を混ぜている姿を見ているためか、ドロドロに汚れながら混ぜ続ける土づくりを嫌がる子どもはほとんどいません。泥の感触を「気持ちいい」、「チョコレートみたい」と表現する子どももいました。

土づくりと並行して、種もみをまきます。水を張ったバットに種もみを入れ、１週間もすれば、芽が出てきます。「もやしみたい！」と子どもたちは大喜び。

芽が出たら今度は土づくりをしたバケツに植え替え。泥の中に２～３センチ間隔で穴をあけて、芽が出た種もみを植えます。

モヤシのように小さかった芽が伸び、20センチくらいになれば、今度は間引きです。「ギュウギュウやと、しんどいやろ。元気なお米に育つように、場所をあけたらんとな」先生の言葉に納得して、間引き作業に入ります。この間引き作業をする程度に大きくなった稲が、田植えをする稲なのです。

バケツ稲づくりを並行して進めることで、自分たちが田んぼに行って田植えをさせてもらうまでに、お百姓さんがとても手間をかけていることに子どもたちは気づいていきます。

活動３：泥田遊び、田植え

梅雨が始まる少し前に田植えをします。田植えの前には、水をはった田んぼで思いっきり遊ばせてもらいます。

泥の中に座り込んで「この土、団子にできへんなぁ」と砂場の土との違いに気づいたり、体に塗ってみて「ヌルヌルや！」と驚いたり。

ドロッとしたカエルの卵を発見する子どもや、茶色のカエルを見つけて図鑑で調べる子どももおり、それぞれに楽しんでいます。

一方、初めて田んぼにやってきた３歳児は初めて経験する泥の感触を怖がったり、服が汚れることを嫌がったり、田んぼの独特の匂いに驚いたりで、泣いてしまう子どももたくさんいます。

そんな子どもたちは、木陰でのんびりと休み、周りの風景を見ることからはじめます。少し落ち着いたら、用意していた黒い画用紙に、田んぼの泥を使って、手でお絵描きをします。こうして少しずつ田んぼに慣れていきます。

思いっきり遊んだら、いよいよ田植えの経験。「気持ち悪い」「足抜けへん！」と言いながらも友達と手をつないだり、先生に助けを求めながら稲の苗を植えていきます。

ものすごく大変な思いをして田植えをしても、植

えたのは田んぼのほんの一部だけ。とても広い田んぼに稲を植えることがどんなに大変なことなのか、子どもたちは身を持って理解します。

活動４：稲の花が咲いた！

セミが鳴き始める夏の盛り、稲の成長を見るために田んぼを訪れます。小さかった稲がグングン伸びていて青々としています。

「お～い！みんな、これ見てみ～。何か白いものがついてるで」何か発見した子どもが友達に伝えます。図鑑で調べてみると、稲の花であることがわかりました。

稲の花はとっても地味で、じっと目を凝らして、やっと見つけることができます。しかし、毎年、気づく子どもがいて、周りの子どもたちに伝えます。

０歳からお兄ちゃん、お姉ちゃんのお米作りを見ているので、「花が咲いたら、実がいっぱいできるんやな」「この実、一つ一つがお米になるんやね。」と、お米の成長に見通しを持つことができます。

園庭で作っているバケツ稲は、稲を間引いた後、何度か蒸発した水を足しただけで、特に何もせず成長を見守っていました。

子どもたちは、稲の成長には、土づくりなど農家の方たちの努力のほかにも、太陽、雨、温度などの自然の力がとても大きくかかわっていることを理解していきます。作物を育てることを通じて、「人」に加え「自然」のありがたさも感じ、子どもたちは関心を拡げていきます。

活動５：稲刈り・稲木干し

秋がくれば、いよいよ稲刈りです。

先生から「お米さんがおいしいですよ、食べてください、とおじぎしてくれたら稲刈りの時期ですよ」と教えてもらったことを覚えている子どもが、園庭のバケツ稲の成長を見ながら、稲刈りに出かけるのを楽しみにしていました。

一人ひとりが鎌を持って稲刈りを経験します。鎌を持つのは初めての子どもがほとんどです。友達も自分もけががないように、ルールを守って危険な物を正しく使うことを経験します。

稲は結構固く、簡単には刈れません。それでも子どもたちは、汗だくになりながら集中して無言で稲刈りに取り組みます。

刈り取った稲は園に持ち帰り、稲木に干します。「家の屋根みたい。お日様がいっぱいあたって、おいしいお米ができるかな」と楽しみに待ちます。

稲木干しの稲を引っ張っている子どもがいたら、子ども同士で「駄目だよ」と注意しあっています。また、稲木干しの最中に落ちた米粒を大事に、大事に拾っている子どももいました。

農家の方と自然の力を借りて、自分たちが育て収

穫したお米、一粒一粒を大切にしよう、という気持ちが子どもたちの間で自然に育まれていきます。

活動６：脱穀

２～３週間ほど稲を乾燥させたら脱穀をします。稲刈り、稲木干し、脱穀の工程は、現在ではコンバインで一気にします。しかしそれでは収穫したお米がどうやったらスーパーで売っている姿になるのか子どもに伝わらないため、園では昔ながらの足ふみ脱穀機を使います。

足ふみ脱穀機は引っ張る力がとても強いので、うっかりすると、手も稲と一緒に巻き込まれてしまう危険があります。危ないことを伝え、子どもたちも集中して取り組みます。

足ふみ脱穀機で籾を稲穂から外す作業を体験して、「パラパラいうとる！」「これがお米になるの？」という子どもに、先生が「これは、モミっていうのですよ。みんなが園服を着ているのと同じで、一枚脱いで肌着になったら、お米でいえば玄米。全部脱いで裸になった状態が白米。みんなが普段食べているお米は、裸の状態なのですよ」と伝えます。

それを聞いて、手でモミをむき始める子どももいます。一粒でもむくのは結構大変です。改めて、収穫した稲を口に入れるものに加工する大変さを学びます。

活動７：おにぎりパーティー

少し肌寒くなる頃、半年かけて育ててきたお米をいただくおにぎりパーティーをします。

電気やガス、はたまた炊飯器がなくても、水と火さえあればご飯が炊けることを子どもたちに見せてあげたい、と大きな釜に薪をくべて、ご飯を炊きます。

炊きたてのごはんを、自分でおにぎりにして食べます。おにぎりパーティーを始めたころ、白米だけでは、子どもたちが食べないのではないかと心配し、塩やおにぎりの中に入れる食材、のりを準備していました。

しかし、子どもたちには食べ物そのもののおいしさを味わう力があり、その感覚は大人よりも鋭かったことに先生は気づかされました。自分で育て、釜で炊いた炊きたてのご飯は、それだけで子どもたちにとって十分においしいごちそうだったのです。

今年も、子どもたちは「おいしいなぁ」「これ僕が稲刈りしたお米や」「家のご飯と匂いが違う」などと言いながら、一人で３個食べ、最後は、釜の底についたコゲをおいしくいただきました。

活動８：しめ縄づくり・とんど

年末が近づくと、収穫後のわらでしめ縄を作り、お正月の準備に取り掛かります。

しめ縄を編むのはなかなか難しく、苦戦する子どももいます。「何でわざわざ作るの。スーパーに売ってるで」という子どももいますが、「しめ縄を目印に、神様が来てくれるのよ。皆で育てた稲のわらでしめ縄を作って、今年お米がたくさんとれたことに感謝して、来年もお願いしますって神様に言おうね」と言うと、子どもなりに納得してしめ縄づくりに取り掛かります。

作ったしめ縄を園の玄関や各クラスに飾り、お正月を迎えます。

年が明けて２週間ほどしたら、とんどをします。とんどは、収穫した稲のわらを、習字や絵と共に焼いて無病息災、五穀豊穣を祈る伝統的な行事です。とんどの火に、年末に作ったしめ縄も入れて焼きます。

しめ縄に来てくれた神様に思いを寄せて「神様ありがとう」「お空から見ていてね」「気をつけてね」「また来てね」と叫ぶ子どもたち。

土を作り、稲を育て、収穫し、米を味わい、今年の収穫に感謝し、来年の豊作を祈る。稲作を中心に、地域で長年、繰り返されてきた暮らしに、子どもたちなりに思いを寄せるひと時です。

ふるさとの自然を大切にする心を育む

園で米づくり体験に取り組んできた結果、お茶碗にご飯粒を残さず、きれいに食べる子が多くなりました。１年間通して昔ながらの米作りを体験することで、スーパーに並んでいるお米がどうやって作られているか、子どもなりに理解するようになり、「食べてみたい」と心から思うようになったからだと思います。

自分たちが毎日食べているお米は、人の手がとてもかかっている、そして、ふるさとの土、水、太陽が育んできたものである、ということを体験を通じて理解することで、ふるさとの環境を大切にする心を育んでいきたいと思います。

〈お話を伺った人〉
社会福祉法人かすぎ野
認定こども園西脇こども園
伊達恵一 園長 、片山ひとみ 主幹保育教諭

教えて先輩！

ナゼ？ナニ？ 質問コーナー

Q 環境学習実施のポイントは？

自然体験をすることで子どもたちが地域の様子や周りの身近な人々と関わり、それらについて考え愛着を持つことができるようにしました。

子どもの発見したこと『気づき』、なに？なぜ？『不思議』やってみようと思う気持ち『挑戦』などの発信を見逃さず子どもと共に考え体感します。

Q 苦労した点は何ですか？

25年前から行ってきた米づくりを昔ながらの方法で行い継承してきました。その中で若い先生に伝統文化の良さと活動の仕方をどう説明し、伝えたらいいのかを考え、昨年までのビデオや写真などを一緒に観て共有する、活動の際にはしっかりとタイムテーブルをたてるよう努力しました。

Q 予想外にできたことは？

0歳児から米づくりに無理のないよう参加してきたので、4、5歳児になるといろいろなことに興味を示し積極的に参加するようになりました。発見したことも、図鑑や絵本で調べる姿がよく見られました。また、年下にやさしく教える場面も多々あり感心しました。子どもたちは、いろいろな経験を積み周りの人に感謝の気持ちを持つ言葉が何げない会話の中から出ることに驚かされました。

Q これから取り組む園へのアドバイス

地域の方々の協力があってこその『わくわくお米作り体験！春夏秋冬』だったのですが、身近にあるものに先生が興味を持ち、子どもにたくさんの“気づき”の場を作る事が大切ではないかと思います。そして、気づいた瞬間を見逃さず保育につなげられればすてきだなと思います。

社会福祉法人かすぎ野　認定こども園西脇こども園

西脇市のほぼ中心に位置し、すぐ裏には大きなお寺と広い境内、そして裏山がある。また、西側には童子山公園、そして西脇こども園を挟み東西に杉原川と加古川が流れる自然豊かな環境にあり、四季を通して自然にふれる機会に恵まれている。近くの農家の方から田を借り、稲作りを0歳児から5歳児まで関わり楽しんでいる。

住 所
西脇市西脇760-1

電 話
0795-22-2909

西脇こども園
活動プログラム　深まりの過程

〈やったこと〉

うごく

気づく

活動 1　れんげ田で遊ぶ（体験）

活動 2　園庭でバケツ稲作りをする（体験）
（土作り、種もみまき、発芽、苗植え）

活動 3
・泥田であそぶ（体験）
・田植えを経験する（体験）

拡げる

活動 4　稲が成長してきた８月頃に田んぼに行く（見る）

活動 5　稲刈り・稲木干し（体験）

活動 6　脱穀（体験）

活動 7　おにぎりパーティー（クッキング）

深める

活動 8　しめ縄づくり　　とんど（造形遊び）

〈子どもの変化〉	〈環境構成・教師の援助〉
・田んぼは土づくりから始まっていることに気づく ・田んぼにはたくさんの生き物が棲んでいることに気づく	・れんげ田で思いっきり遊ばせて興味をもたせる（しかける） ・田んぼにれんげを植えている理由を教える（知識を伝える）
・田んぼの土づくりの大変さに気づく	・昨年使った土をとっておく（準備する） ・土づくりを子どもに経験させる（しかける） ・乳児クラスの子どもたちに土づくりをしている姿を見せる（しかける）
・田んぼの泥を五感で感じ砂場の土とはちがうと気づく ・お百姓さんがとても大変な思いをして田植えをしていることに気づく	・３歳から田んぼにつれていき、少しずつ泥の感覚に慣れるようにする（しかける） ・入園式で保護者に説明する（保護者をまきこむ） （説明例） ［１年間のお米作りの体験の中で、子どもたちはどろんこになります。そのため衣服が汚れることがありますが、ご了承願います。］
・稲を育てるには「人」に加え「自然」の力も大切なことにも気づき、周囲の環境にも関心を拡げる	・園でもバケツで稲を育て、常に変化を見る（掲示） ・稲の花を子どもに気づかせる（しかける）
・稲を育てたことに達成感をもつ ・人と自然の力を借りて自分たちで育てたお米１粒、１粒を大切にしようと思う	・鎌を使って自分で刈る ・園庭で稲木干しをする
・収穫した米の加工の過程を知る	・昔ながらの足ふみ脱穀機を使う ・米の加工の過程を例え話をつかいわかりやすく教える → 伝承を大切に！
・火と水があれば、米が炊けることを知る ・お米そのものの味を味わい、人と自然に感謝する 先生の予想を超えた子どもたち！！ 自分で育てた米はそれだけで十分なごちそう！	・園庭で大きなお釜でお米をたく ・自分でおにぎりをにぎる
・稲を使った伝統行事を通じて、田んぼを中心とした一年間の暮らしのサイクルを理解しふるさとへの愛着を持つ	・毎年、米をつくるサイクルをくりかえす（続ける）

「ひょうごエコっこ育成事業」
モデル園の事例

遊びを通じて子どもに「もったいない」を伝える

姫路市立安室東幼稚園

ゴミ処理施設「エコパークあぼし」で体験したリサイクルゲームや○×ゲームを園に戻ってからも廃材などで再現し、遊び続けるなかで「リサイクル」や「エコ」への理解がとても深まり、食べ残しをしない等、子どもなりに「もったいない」を生活の中で心がけられるように成長しました。

子どもの興味に寄り添いながら「リサイクル」や「エコ」を深める

活動プログラムができるまで

○子どもにとって身近な内容に引きつける

平成27年度のエコっこ育成事業に取り組むにあたり苦労したことは、環境問題という難しい内容をどうやったら子どもが理解し、子どもたちなりに実行していけるか、ということです。

子どもたちに伝わる内容にするために、まずは、子どもたちの毎日の生活をイメージすることから始めました。

その中で出てきたのが、幼稚園から徒歩３分のところにある、スーパーの店頭においてある回収ボックスでした。紙パック、アルミ缶、ペットボトルなどを分類して入れる箱を、多くの子どもたちは目にしているはずです。

この箱は何を入れるのか？この箱に入れたものはどうなるのか？そもそも、なぜ、この箱が置いてあるのか？そんな導入であれば、年長さんでも、リサイクルやゴミに興味をもち、「もったいない」を理解し、物を大切にする行動につなげていけるのではないか、と考えました。

○既存の活動・行事にエコの要素を取り入れる

リサイクルを切り口にして、環境問題に取り組んで行こうと決めましたが、１年の流れがきっちり決まっている園生活の中に新しい活動を入れていくのは大変です。また、何か一つ活動をしただけでは、子どもたちに伝えることはできません。

少しずつ伝え、繰り返し、活動を深めていくために、運動会、園外学習、オープンスクールという毎年の行事に、リサイクルやエコの視点を組み込んだ活動プログラムを取り入れました。

活動１：リサイクルマーク集め

ねらい
- リサイクルマークに気づく
- マークとマークがついていたものを見比べ、意味を知る

子どもたちにリサイクルに興味を持ってもらうはじめの一歩として、教室のホワイトボードの隣に大きな画用紙を用意し、リサイクルマークを貼っていく取組をしました。

給食で青リンゴゼリーが出た日に、ゼリーのふたについていたプラのマークを見せて、「これ、何のマークやろな？」と子どもたちに聞くと「見たことあるで～」と答えてくれる子どもたちが何人かいま

した。「このマーク、他にもあったら教えてなぁ、ここに貼っておくわ」と子どもたちに話しました。

翌翌日の給食で、小袋に入った小魚と牛乳が出ました。「魚の袋にゼリーと同じマークがあるで」「牛乳パックにもマークがあるけど、魚の袋のマークとちょっと違う」と色々なマークがあることに気づきはじめました。

豆腐のパックやペットボトルのラベルにもマークがついていることに気づき、家から持ってきて、貼ってくれる子どもたちもいました。

給食で牛乳が出た日には、みんなが貼ったので、模造紙が牛乳パックでいっぱいになってしまいました。そこで、途中から同じ物は貼らない、とルールを決めました。

活動２：運動会「あつまれ！エコっこ」

ねらい
- リサイクルマークでの分別遊びをする

子どもたちがリサイクルマークに興味を持ち始めたことから、運動会の親子競技にペットボトル等の再利用容器の分別ゲームを取り入れました。

ペットボトル、牛乳パック、空き缶、プラなどの絵が書かれたカードを引いて、廃材の山からカードに合った物をとり、リサイクルボックスに分別するという競技です。

最初は廃材置き場まで早く行こうなど、競争に気を取られていたようですが、いざ競技が始まると、廃材の中からお目当ての物を探し、正しいボックスに入れることを楽しんでいました。

プラはレジ袋やお菓子の袋、豆腐の容器など色々あるのですが、子どもたちは卵パックばかりに目がいっていたようです。「ない、ない」と言いながら懸命に、廃材の中からプラのマークを探していました。

リサイクルマーク集めの活動を通してマークに詳しくなった子どもたち。お父さんやお母さんに「これ、プラのマークやで」と得意そうに教えているほほえましい姿が見られました。

活動３：体験活動「エコパークあぼし」訪問

ねらい
- リサイクルマークにより分別したゴミが新たな物に生まれ変わることを知る
- たくさんのゴミが出ていることを実感する
- 「もったいない」を考える

工場見学等を通じて子どもたちの知見を広げる体験活動で、今年は「エコパークあぼし」に行きました。「エコパークあぼし」は、姫路市内で日々排出されるゴミを焼却したり、再資源化する施設です。

まず見学したのはゴミ焼却施設。ゴミ収集車が市内各地から集めてきたゴミを、巨大なクレーンで持ち上げて焼却炉に入れていきます。

子どもたちは、「大きな爪」「怪獣みたいや」「こんなにゴミがあるんや」「ぬいぐるみが捨てられている」「布団もあるで！」と口々につぶやき、巨大クレーンの動きをじっと見つめていました。

信じられないような物が分別されずにそのまま捨てられていること、毎日、大量のゴミが捨てられていることに衝撃を受けていました。

次に見学したのは、再資源化施設。粗大ゴミ、ビンやペットボトル等の資源ゴミを受け入れて、粉砕・選別を行い、資源の回収をする施設です。手作業でビンを分別している姿を見学しました。

施設見学の合間には、遊びながら考え、学べるミッションゲーム。「生まれ変わった製品を探せ！」(写真1)というゲームでは、作業着、本などの製品がどの資源ゴミから作られているかを当てるゲームです。

(写真1)生まれ変わった製品を探せ！

(写真2)暮らしのムダを探せ！

(写真3)○×ゲーム

(写真4)分別ゲーム

子どもたちは、ペットボトルや紙パック、ビン、缶などリサイクルマークがついた商品が思いも寄らないものに生まれ変わっていることに驚いています。

「ペットボトルが作業着になるわけないやん！」正解にたどり着くために、子どもたちは必死に話し合います。正解したら担任とハイタッチし、とても盛り上がりました。

「暮らしのムダを探せ！」(写真2)というゲームは、ダイニングキッチンのセットの中で「もったいない」を見つけたらボタンを押して答えるゲームです。「テレビつけっぱなしやん」「ご飯を残したらあかん」「まだ使えるボールペンが捨てられているで！」など、次々と暮らしの中の「もったいない」を探し出します。

そして、何よりも子どもたちの心を捉えたのが答えを言うときに押せる早押しボタン(写真5)です。押したら「ピンポーン」という音がでるのがとても良かったようです。

(写真5)早押しボタン

その他、「電気のつけっぱなし」「エコバックで買物」などの行動が環境にやさしいかどうかの○×ゲーム(写真3)、「ＣＤ」「魚の骨」「机」などのゴミは、可燃か、不燃か、粗大ゴミか分ける分別ゲーム(写真4)も体験しました。

初めて見るゴミの量に驚いていた子どもたち。リサイクルで何に生まれ変わるか考えたり、「もったいない」を見つけたり。遊びをとおして、リサイクル、さらには、エコへの興味を深めていきました。

活動４：年中さんに体験活動を報告

年長さんが「エコパークあぼし」に行ってから１週間後、「いってらっしゃい」と見送ってくれた年中さんに、体験活動の報告をする会をしました。

年中さんへの報告方法を子どもたちに相談すると、「絵を描いて見せたらいい」「見せるだけだと分からないから、こんなのありましたと言う」「何言うか分からなくなるといけないから、絵の後ろに書いたらええんや！」ということで、紙芝居を作って報告することになりました。

巨大クレーン、大量のゴミ、資源ゴミを手で分別

している様子、「暮らしのムダを探せ！」ゲームなど、思い思いの絵を描いて、懸命に、年中さんに教えていました。

報告会以外でも、一緒に外遊びしながら年中さんに「ペットボトルって作業着に生まれ変わるんやで」と教えたり、お部屋に年中さんが遊びに来たときに、棚の上から自分の作った紙芝居を取り出して、再度教えている姿も見られました。

「エコパークあぼし」のミッションゲームをきっかけに「帽子をかぶって外に行く、○か×か？」「私のハンカチにお花の絵がかいている、○か×か？」と、子どもたちの間で○×クイズを出し合うことがはやりました。解答する時は、これまたミッションゲームの早押しボタンをまねた「マイボタン」を廃材で作り、「ピンポーン」と言ってから答えるのがブームでした。

「エコパークあぼし」での体験学習で学んだことを教え合ったり、楽しかったことを遊びに取り入れたりする姿が夏休み前までの間、多く見られました。

活動５：オープンスクール「エコっこ遊びを楽しもう」

ねらい
- 身近な「もったいない」にたくさん気づく
- エコへの意欲を高める

安室東幼稚園では、毎年秋に保護者や未就園児を園に招待してお店屋さんごっこを楽しむオープンスクールをやっています。

秋になって、今年は何のお店を出そうか相談する前に、「もうすぐみんな小学１年生だよね。ペットボトルがリサイクルされて作られているランドセルがあるって知っていた？」とリサイクルに再度、興味を持たせる言葉かけをしました。

それをきっかけに「夏前にエコパークあぼしに行ったなぁ。」と思いだし、そこで体験したミッションゲームが面白かったので、ゲーム屋さんをクラスでやりたい、という話になりました。

一つはクラスで流行した○×クイズ。「もったいないかどうか」を○か×で答えてもらうようにしました。

クイズの問題を考えるとき、「脱いだ靴を揃えるのは○か×か」など、全く「もったいない」と関係ないクイズを提案する子どもがいて不安になりました。しかし「水や電気のつけっぱなしのことじゃないの？」と意見を出す子もいて、話し合ううちにこれも「もったいないね！」と子どもが次々と自分で気づき、クイズを作りました。

もう一つは「生まれ変わった製品を探せ！」ゲーム。ゲーム機がないのに「どうやってゲームをするの？」と、少しドキドキしながら子どもたちに相談してみると、「段ボールでゲーム機をみんなで作る！」と元気な返事。「エコパークあぼし」のゲーム機にはついていなかったけど、皆で作るオープンスクールのゲーム機には、早押しのボタンが「絶対に必要」なのだそうです。

（皆で作ったオープンスクールのゲーム機）

オープンスクールの当日、「生まれ変わった製品を探せ！」のゲーム屋さんでは、「ビー玉は、ペットボトル・牛乳パック・瓶のどれが生まれ変わったもの？」などのリサイクルクイズを出題しました。

リサイクルの知識がない年中さんや未就園児さんには難し過ぎたみたいで、正解が分かる子どもはほとんどいませんでした。

そこで、年中さん向けにはヒントを作り、未就園児さんには、隣に立って丁寧に教えることにしました。

更に、「もっとお客さんに来てもらいたい！看板を作ろう！」と子どもたちが言い出し、急きょ、画用紙とペンでお店の看板作りが始まりました。「看板を持ちたい！！」と言う子どもがたくさんおり、子どもたち同士で「時計の長い針が２まで進んだら交代やで」とルールを作っていました。

「エコパークあぼし」で学び、経験した「もったいない」や「リサイクル」について、自分たちでゲームを作って遊びながら学びを深め、自信をつけていきました。そして、「自分はこんなことも知っている！年中さんや未就園児さんに、もっと教えたい！」と、強い意欲につながってきました。そんな年長さんの大きな成長を感じたオープンスクールでした。

「遊び」が学びを深め行動につなげる

○「もったいない」が子どもの生活を変えた！

環境学習を園で進めていくなかで、子どもたちが、ごはんをよく食べるように変わっていきました。パンが苦手で全く食べることができなかった子どもがいましたが、「先生、パンは嫌いやけど、もったいないから頑張るわ」と言って、毎日少しずつ、パンを食べることができるようになっていった姿には感動しました。

制作活動では、画用紙やテープなどを必要以上に使うことが減りました。特に画用紙では「これはまだ使える」「これはもう使えない」と自分で判断して、最後まで使ってから捨てるようになりました。

園庭遊びの時、先生が部屋の電気を消し忘れていたら、「電気つけっぱなしやったから、消しといたで！」と気づいた子どもが進んで電気を消してくれるようになるなど、電気のつけっぱなしや水の出しっぱなしなどによく気づき、「もったいない」と言いながら自分で消したり止めたりしている姿をよく見かけるようになりました。

環境学習を進めるにつれて、「リサイクル」や「エコ」が子どもたちに意外と定着し、子どもたちなりに「もったいない」を意識して自分の生活を変えていきました。「リサイクル」や「エコ」を理解できるだろうか、と思っていたので、「もったいない」といいながら、生活を見直す子どもたちの成長に驚かされました。

○子どもたちの興味に寄り添い少しずつ

環境学習の内容は難しいですが、子どもにとって身近なところから始める、実物を見る、体験する、ゲームなど遊びの要素も取り入れるなど、子どもが興味をもって理解しやすいように工夫すれば伝わります。

体験したことや学んだことは、時間が経つと忘れてしまうので、伝えたり、遊びにつなげたり、時には子どもたちに思い出させるような声かけをしたりして、興味をもたせ続けることもとても大切です。

特に、楽しかったことを遊びにつなげていくことで、子どもたちは知識だけでなく、関心をもち、しっかり考えることが出来たのではないかと思います。このことが、「エコパークあぼし」で学んだ「もったいない」や「エコ」を毎日の生活に取り入れる原動力になりました。

〈お話を伺った人〉
姫路市立安室東幼稚園
白國里奈 先生

教えて先輩！

ナゼ？ナニ？ 質問コーナー

Q 環境学習実施のポイントは？

環境について生活を送る中で考える機会が少ないことが、環境学習と聞いて難しく感じる理由ではないかと思います。子どもが興味関心をもてるよう、身近なことから始めれば、「知りたい！」「どうなるのだろう？」と子どもから自発的に取り組み始めます。

Q 苦労した点は何ですか？

実施のポイントとかぶりますが、子どもに興味を持たせるため、環境をどうやって子どもの身近なところに引き寄せたらよいのか、また、子どもの興味を持続させるためにはどうすれば良いか、苦労しました。

環境問題は小学校の授業で学ぶ内容です。そのような難しい内容を５歳児なりに理解し、実行できるように伝えるか、苦労しました。

Q 予想外にできたことは？

子どもたちが家で見つけたリサイクルマークを園に持ってくるなど、「もったいない」「りさいくる」などの言葉が思ったよりも早く子どもたちに浸透しました。

電気のつけっぱなしや水の出しっぱなしに気づくようになるなど、子どもなりに理解し「エコ」を各自の生活の中に取り入れていけるようになったことには驚きました。

Q これから取り組む園へのアドバイス

環境というと、非常に大きく理解しにくい内容に思えますが、身近な問題に引きつけるなど、説明の方法を工夫すれば、子どもたちは十分に理解する力をもっています。

学んだことや興味をもったことを遊びにつなげていくことで、学びを深め、行動に移していく力を育てていきました。

姫路市立安室東幼稚園

姫路市中心部にあり、小・中学校と隣接し周囲には生涯大学など教育施設が多い。新興住宅地が広がり田畑は少ない。エコ活動体験の場として「エコパークあぼし」を活用した。公園での季節の花や虫探し・芝滑りなどの自然体験や借農地での栽培活動を通して、豊かな感性を育てる環境学習を進めている。

住 所
姫路市辻井８丁目18-1

電 話
079-294-2144

安室東幼稚園

活動プログラム　深まりの過程

〈やったこと〉

うごく

気づく

活動 1　毎日の生活で使う物についているリサイクルマークを集め、分類する（収集）

活動 2　親子でリサイクルマークの分別遊びをする（体験）

拡げる

活動 3　ゴミ焼却とゴミの再資源化を行う「エコパークあぼし」を見学する（体験）

活動 4　年中さんに「エコパークあぼし」で、見た事、学んだことを紙芝居で報告する（言葉での伝え合い）（造形遊び）

深める

活動 5　「エコパークあぼし」で体験したゲームやクイズを再現し年中さんや未就園児さんに遊びを通して教える（言葉での伝え合い）（造形遊び）

〈子どもの変化〉	〈環境構成・教師の援助〉
・色んな物にリサイクルマークがついていることに気づく ・マークとマークがついていたものを見比べて意味を知る	・「これ、何のマークやろな？」(声かけ) ・子どもの目につくところに、貼っておくコーナーをつくる(掲示) ・「このマーク、ちょっと違う」(声かけ)
・分別するためにマークがついていることに気づく ・プラは色んな物があり、マークがついていないと分別が難しいことを知る	・楽しみながら分別体験させる場をつくる(しかける) ・色々なプラの廃材を準備する(準備する)
・ゴミの多さを見て「もったいない」を考える ・分別された物が、服や本に生まれ変わる「リサイクル」を知る	・体験活動で「エコパークあぼし」へ行く(しかける) ここが魅力！！ ・1日に処理されているゴミの実物を見ることができる ・ゲームを通じて遊びながら学べる
・「もったいない」「リサイクル」を再度考える ・「もったいない」「リサイクル」を実践し伝えたいと思いはじめる ・早押しボタン、○×クイズなど、楽しかったことを遊びに取り入れる	・年中さんに、報告する場をつくる(しかける)
・夏休み前の「もったいない」「リサイクル」を思い出す ・「もったいない」をクラス全員が理解する ・身近な「もったいない」にたくさん気づき自分の生活に反映する ・「リサイクル」を自分より小さい子たちに教えたい！と強い意欲を持つ 先生の予想を超えた子どもたち！！ 看板をつくる！ヒントを出す！	・「ペットボトルからつくられているランドセルもあるって知ってた？」(声かけ) ・早押しボタン、○×クイズなど、子どもが興味を持ったポイントと学びを結びつけて新しい遊びをつくり出す(しかける)

「ひょうごエコっこ育成事業」
モデル園の事例

都会の子どもたちに「ふるさと」の自然で遊び込む経験を！～雑草園プロジェクト～

学校法人あけぼの学院
認定こども園武庫愛の園幼稚園

尼崎の住宅地にある幼稚園で、子どもたちが身近な自然を感じ、遊び込める場を作ろうと、保護者と協力して「雑草園プロジェクト」を実施しました。都会にあっても身近な雑草が自分たちの遊びや生活を豊かにしてくれる事に気付き、自然やふるさとを大切にしようという気持ちが芽生えました。

“ふるさと尼崎”を再発見しよう！

活動プログラムができるまで

○保護者と一緒に「身近な雑草」を集める

「エコっこ育成事業」のテーマのひとつが「ふるさと環境体験活動」でした。尼崎市内の住宅地、いわゆる都会の幼稚園に通う子どもたちが、身近な自然を知り「ふるさと」としての地域に親しみを持ってもらう仕組みとして実施したのが「雑草園プロジェクト」です。

このプロジェクトは、保護者に呼びかけ、カラスノエンドウ、ツユクサなどの草花遊びができる雑草を、自宅やその周辺、実家等から根っこごと（できれば土がついた状態で）持参してもらい、園内の花壇に移植して、「雑草園」を造り、子どもが日常的に遊べるように支援するものです。

武庫愛の園幼稚園では、スクールバスに乗って複数の小学校区からたくさんの子どもたちが通ってきます。市内の各地域に住む子どもたち全員が、「雑草園」の草花を身近に感じてもらうため、放課後や休日、夏休みなどに、保護者と子どもで近所を散策し、雑草を採取してもらえるような仕組みになるよう、工夫しました。

活動１：雑草園、始動！！

保護者に「雑草園プロジェクト」の協力を依頼すると「おしろい花が線路のところにあった」「カラスノエンドウが中学校の横にあった」など、すぐに続々と情報が寄せられました。

自宅や祖父母宅から七草を株分けして持参してくれる保護者、れんげの種をたくさん持って来られる保護者もいました。れんげの種は、れんげ畑を造る新しい取り組みに発展するなど、保護者からの大きな反響に驚きました。

保護者にとっては、自分の幼い頃のノスタルジーと重ね合わせ、雑草を使ってままごとをしたり、草花あそびをした経験を我が子にもさせてあげたいという思いが、この活動へ取り組む原動力になっていたのではないかと感じます。

一方、子どもたちにとっては、雑草の種類や数が増え、雑草園が出来上がっていく過程よりも、自分たちでお目当ての雑草が生えている場所を発見していく、いわば“宝探し”のような経験そのものが楽しかったように感じました。探し当てたときには、まるで鉱脈を掘り当てたかのように喜び、興奮と感

動で紅潮した表情で園に持ち込んでいた姿が印象的でした。

集まってきた雑草を植えるために、園庭の裏庭の植木等を移植し、雑草の栽培場所を確保しました。本来幼稚園は、雑草は全て抜いてきれいにするという場所だと思うのですが、あえて“雑草を育てる”という、逆の取り組みが子どもたちにとっては何とも面白かったようです。

〈雑草園にする前の花壇〉

「ほたるぶくろ」「たで」など、きれいに名札を立て、花壇のようにしたのもつかの間、雑草は夏の太陽の力で生い茂っていきました。

〈雑草園できたての様子〉

〈雑草園　夏頃〉

生命力の強いヨモギやオシロイバナは、切っても時期が来ると生えてきます。雑草園１年目に植えた、秋の七草、春の七草、れんげは、残念ながら２年目、３年目は発芽しませんでした。一方で、植えた覚えのない、カモミールやミントがいつの間にか生えているのを子どもに教えられ、驚いたこともありました。

生い茂った「雑草園」は虫の住み家となっていき、今では草花遊びだけでなく虫探しなどの活動への展開も見られる場所になりました。

ふだん何げなく通っている道や公園に、実はたくさんの種類の雑草が生えている、都会でも自然はきちんと存在する、そんな気づきを子どもたちに与えた雑草園づくりでした。

雑草園で遊び込む

保護者の協力を得ながら造った雑草園。初めは「草花を自由に使ってよい」と言っても遊び方がわからず、千切るだけの子どももいましたが、先生が遊び方を示したり、子どもが自ら関わりたくなるような環境を工夫することで、活動を拡げ、深めていきました。

以下、子どもたちが雑草園でどのように遊び込み、身近な自然への気付きを拡げ、深めていったのかをリポートします。

活動２：雑草園とクッキング

【拡げる】ヨモギ団子づくり

武庫愛の園幼稚園では、毎年５月に子どもたちとヨモギの新芽を摘んでヨモギ団子を作る取り組みをしています。ヨモギは、武庫川の土手に摘みに行ったり、先生が園庭でひそかに栽培（？！）していました。しかし、クラス30人分のヨモギを確保することが難しかったので、雑草園で育て始めました。

ヨモギ団子作りの第一歩は、雑草園でヨモギを正しく探し出し、摘むことから始まります。ヨモギの匂い、葉っぱの裏が白いことなど、ヨモギの性質を写真や絵本を使って説明します。

先生からヨモギを教えてもらったその日は「これヨモギ？先生、あってる？」とどの子どもも自信なさげだったので、迷ったら匂いをかぐように教えました。

翌日になると、ほとんどの子どもはヨモギをすっかり忘れていたので、再度、形を説明し、匂いをかぐことを伝えました。すると、何人かの子どもたちはヨモギだと分かったようです。

翌翌日以降は、ヨモギだと分かった子が、他の子たちに教えるようになりました。このようにして、1週間もすれば、クラスの子ども、ほぼ全員がヨモギを覚えました。

子どもたちがヨモギを知ったところで、いよいよお団子づくりです。絵本「ばばばあちゃんのヨモギだんご」を見て、作り方を理解します。

「ヨモギって食べることができるんだよ。昔の人はヨモギをすり潰したお団子を作って、匂いを楽しみ、春を感じていたんだよ」そんなお話をしました。

「雑草を食べることができる！？更にいい匂いがして、美味しい！！」そんなことを知って、子どもはますます、ヨモギへの興味を深めていきました。

【深める】ヨモギや雑草を使っておままごと

ヨモギ団子づくりをした後も、ヨモギを集めて、ゼリーのカップとお箸でヨモギをすり潰して、おままごとでお団子づくりをする子どもたちの姿がありました。

ヨモギを集めている途中、ヨモギとは違う「良い匂い」がする葉っぱを見つけ、「先生これなに？」と聞きにきた子どもがいました。すると何とミントの葉っぱ！植えた覚えのないもので、逆に先生が驚いてしまいました。

保護者の協力を得て、おままごと用に集めたフライパンを使って、ヨモギの葉っぱで炒め物を作る子どもが出てきました。「コショウがないよ！」「砂をコショウにしよう！」と子どもなりに工夫したり、「ヨモギの葉っぱが足りない！」「摘んでくるよ！」と集団遊びが始まりました。

また、ミートナイフを包丁に見立てて、葉っぱを切る子どもたちもいます。葉っぱをリアルに切る感覚、葉っぱを切ったら出る青臭い匂いを楽しんでいます。

本物の雑草を使うことで、「ママゴトトントン」では体験出来ないような、リアルなおままごとを子どもたちが体験しています。そこから子どもたちのイメージが深まり、遊びとして深まっていきました。

活動３：雑草園と色水遊び

【拡げる】色水遊び

雑草園には、年間を通じて自由に使って遊ぶことができる草花があるので、子どもたちと色水遊びをしています。

先生が、すり鉢に花を入れてすり潰す姿を少し見せると、まずは自分でやってみて、納得すれば、次は別の草花でもやってみたい！と、子どもなりにイメージを膨らませチャレンジを始めます。

その中で、花や葉っぱによって出る色が違う、色が良く出る物と出ない物がある等を体験しながら子どもたちは学んでいきました。

【深める】ジュース屋さん、混色あそび

子どもたちが色水遊びにすっかり慣れてきた頃、先生がテーブルを出し、その上に黒い布のテーブルクロスをかけ、透明のコップを置きました。

すると、自然発生的にジュース屋さん遊びがはじまりました。「ジュース下さい！」「イチゴジュースで良いですか？はいどうぞ」と、買う人、売る人、作る人の集団遊びが始まります。

ゼラニウムで作ったピンクの色水とパンジーで作った青の色水を混ぜて、紫の色水を作る子どもも出てきました。そのうち、「それ以上色を混ぜたら、汚い色になるからあかん」と子ども同士で声をかけあったり、「この花の色水は時間が経つと汚くなる」など、４歳にして色水の性質を理解する子どもも出てきました。

また、色水が入ったペットボトルに絵を描いて「お花畑」に見立てて部屋に飾ったり、色水の入ったペットボトルに画用紙を入れて、混色を楽しむ子どもがいました。

このように、色水づくりを通じて、自由にイメージを膨らまして、友だち同士で遊ぶ姿が多く見られました。

活動４：雑草園と十五夜

【拡げる】ススキを飾って十五夜を楽しむ

秋には、雑草園のススキを飾って十五夜を楽しみました。「十五夜は秋の収穫を神様に感謝する昔からある行事ですよ。ススキをお供えするのは、稲穂によく似ているからですよ」そんな園長先生のお話を聞いた後、先日の稲刈りで刈り取った稲穂と、本物のススキを見て、触ることで子どもたちは深く納得していました。

【深める】色紙でススキ創作

ススキを家に持って帰りたい、という子どもがいたので、新聞紙を使って作り方を教えたところ、茶

色の紙をクルクルまいて、はさみを使ってススキを作り、お家へ持って帰る子どもがいました。家庭で十五夜の話をする事で、より学びが深まれば、と思いました。

「雑草」に興味を持ち、自由に遊ぶ

○子どもたちの生活の中で持続可能な活動にする

先生たちが雑草を使った遊びや雑草の面白い話、昔の人たちが生活にどのように雑草を取り入れたかを子どもたちに伝えることで、雑草とどうやって遊べばいいか分からない子どもたちが、「雑草」一つ一つを区別し、興味を持つように変わっていきました。

更に、「雑草園」を整備することで、園の中にあって、いつでも自由に遊んで良い対象として「雑草」が子どもたちに認識されるようになりました。

このような取組により、雑草を自由に使い、イメージをどんどん膨らませ、遊び込む姿が徐々に子どもたちの間に拡がってきました。

自然物の雑草は、匂ったり、それぞれ独特の感覚を楽しんだり、子どもたちの五感を豊かに刺激します。また、一人遊びが集団遊びにまで発展していくことも多くありました。

雑草を通じて友達と楽しく自由に遊び込んだ体験が、都会の中にあっても、身近な自然を大切にしようと思う気持ちにつながり、ひいては、ふるさとを大切にしていこう、という行動につながるのではないでしょうか。

〈お話を伺った人〉
学校法人あけぼの学院認定こども園
武庫愛の園幼稚園
濱名清美 園長、福谷純子 先生

教えて先輩！

ナゼ？ナニ？ 質問コーナー

Q 環境学習実施のポイントは？

「環境学習」というと、つい難しく考えて実施に踏み出しにくいこともあるかもしれません。本園で心掛けたことは、単発的なイベントで終わることのないよう、子どもたちの生活のなかで持続可能なものにしていくために、子どもたちが身近に感じ、自由に扱えるものとして「雑草園プロジェクト」を立ち上げました。

Q 苦労した点は何ですか？

「ふるさと体験学習」というテーマだったので、子どもたちに自分たちの住んでいる地域を「ふるさと」として感じ取ってもらうために、どのような取組を展開すればよいのかということに悩みました。そこで、名所・旧跡のような知識としての「ふるさと」ではなく、子どもたちが自身の活動に取り込んで、五感を通して心を動かして遊び込めるような「雑草」に着眼しました。雑草自体は全国津々浦々生えているものですが、保護者と共に地域を歩き、「こんなところに○○がある」という発見とともに、園に持ち帰って「雑草園」に移植することで愛着を感じ、雑草を通して「ふるさと」の環境を知る契機になったのではないかと感じています。

Q 予想外にできたことは？

「雑草園プロジェクト」のお知らせと雑草収集の呼びかけをすると、保護者の方々からの反響が驚くほど大きく、親子で地域を歩き回り、まるで宝探しのようにお目当ての雑草を発見する姿が多く見られました。「雑草」というキーワードをもとに「ふるさと尼崎」の再発見することにつながったのではないかと思います。

Q これから取り組む園へのアドバイス

本来は目の敵にされ、園から排除されがちな雑草ですが、手入れがいらず、虫のすみかともなる「雑草園」は、子どもの自由な発想を引き出してくれます。抜き取っても、ちぎっても子どもの活動を妨げない、制約のない可塑性のある環境として、主体性を育むのに大きな役割を果たしてくれると感じています。

学校法人あけぼの学院　認定こども園武庫愛の園幼稚園

尼崎市の住宅街に立地。周囲にはマンションや住宅が建ち並ぶ。市域は平坦な地形に人口が密集しており、園周辺に緑豊かな山や水と触れ合える川はないが、園内にある畑での活動、武庫川・甲山等での園外保育、身近な場所での自然探しなどにより自然と触れ合う機会づくりに取り組んでいる。

住 所
尼崎市南武庫之荘4-5-23

電 話
06-6438-0030

武庫愛の園幼稚園

活動プログラム　深まりの過程

〈やったこと〉

気づく

活動 1

- 園で植えたい雑草を自宅等から持参してもらう（体験）
- 雑草園を園内に整備する（体験）

拡げる

活動 2

- 雑草園の中から正しくヨモギを摘む
- ヨモギでお団子を作る

活動 3

- 雑草園や園庭の花や葉を使い色水を作る

活動 4

- 雑草園のススキで十五夜の飾りを作る

深める

- ヨモギの葉っぱを使っておままごと

- ジュース屋さんあそび
- 混色あそび
- 色水を部屋にかざる

- 画用紙でススキを作り家に持ち帰る

うごく

〈子どもの変化〉

・身近にある雑草に気づく
（生息場所、種類など）

・雑草はたくさんの種類があると気づく
・遊んだり食べたりすることで、生活に取り入れる

活動2
・ヨモギを識別できるようになる
・他の子にヨモギを教える
・いい香りがする、食べられる草として興味を持ち、大事にしようと思う

活動3
・雑草で色水をつくれることを知り興味を持つ

活動4
・稲とススキの共通点に気づき興味を持つ
・昔から日本の生活にとりいれられていたことを知る

・雑草でイメージをふくらませ、自由に遊ぶ
・分業、協同的な遊びをする

・葉っぱをつむ人、切る人など集団あそびに発展する
・「ヨモギとちがう匂いがする」とミントを見つける

・ジュースを売る人、買う人など集団あそびに発展する
・混色や時間経過による変色など色水の性質を理解する

・家庭でも体験を共有する

〈環境構成・教師の援助〉

・保護者あてに、協力依頼のお便りを出す
（保護者をまきこむ）
・花だんの花や木を移植する（準備する）
・雑草の名前を書いたプレートを作る（準備する）

・雑草それぞれの特徴（臭い、葉の形etc）を教える
（知識を伝える）
・雑草を使った遊びをやってみせる（紹介する）
・雑草にまつわる歴史や文化を教える（知識を伝える）

活動2
・雑草園にヨモギを植える
・ヨモギの特徴を子どもに教える
・絵本をつかい、昔のくらし、団子の作り方を教える

活動3
・色水あそびをやって見せる

活動4
・稲かりの体験をさせる
・十五夜の意味
・ススキを飾る理由を教える

・子どものイメージをふくらませるきっかけを作る
（準備する）（しかける）
・否定しない、手出ししすぎない

・おままごとで使いそうなものを準備する

・テーブル、透明コップ、黒いテーブルクロスを準備し、子どもの目につくところに置いておく

・紙を切ってススキの作り方を教える